

少子化時代の父親

榎場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

6 月 19 日は父の日。最高のプレゼントは市立 E 小学校で実施された父親の授業参観でした。放課後、有志だけの父親学級が開催されて、私もサポート役の一人として招かれ、「少子化時代の父親」についての話し合いが行われ意見を求められました。

少子化の問題は、現代社会の大きな課題として、誰しもが憂い、将来を案じ対策を考えています。原因として、若者の晩婚化、未婚化、果ては非婚化などという言葉が社会に流通するようになり、ライフスタイルの多様化がもたらす家族制度・家族機能の変化にも言及して論じられています。

そもそも家族とは、「婚姻によって結ばれた夫婦を核とし、親子、兄弟姉妹を中心に形成された小集団」と定義されています。

これを受け、現代日本の「家族」をみると、その多くは夫婦（両親）と子どもだけの核家族で、子どもの数も一人か二人が標準になっています。いうまでもなく家族は社会の基本をなすものです。人間らしい感情もここで生まれ、愛憎の葛藤も、離別の悲劇も、この中で起こります。

ところが、「21 世紀は家族の崩壊」とまで言われ、母親が家庭を仕切って、父親は家庭を離れた職場で働き、仕事一途で、家庭を顧みない「心理的父親不在」の家庭が論じられるようになりました。しかし、それは果たして本来の日本人の「心」でしょうか？ 家庭像でしょうか？

◎ 銀も金も玉も何せむに まされる宝 子にしかめやも

今から 1300 年も昔、山上憶良によって詠まれ、万葉集にも収められている秀歌です。銀も金も宝石も何になるのだろうか、子どもに勝る宝など、世の中にはありはしないのだ、と率直に力強く詠み上げています。俗に「子宝」という言葉がありますが、その原点になることを示して詠んでいます。子どもが何よりも大切だというのは、人類普遍の思いです。ここまで真っ直ぐ詠んでいるのは、やはり作者の情の深さと、健全すぎるほど健全な作品とも読めます。

◎ をさなごよ ^{いまし} 汝の父は才^{ざえ}うすく ^{おぶ} しまし ^{たけむら} 負えば 竹群^きに来も 宮 柊二 「日本挽歌」

第二次世界大戦が終わって間もない頃の作。わが子に呼びかける形をとって、お前の父親である私は、才能がなく、生きるのに苦勞が絶えない。思い悩むことばかりで、お前をおんぶして歩いて竹群まで来た、と将来への不安を抱えながら子育てに携わっている父親の感慨が伝わってきます。客観的に見て、作者の宮柊二が「才うすく」とは思えませんが、戦後の混沌とした社会のなかで、子育てをする父親の姿は、イクメンなどというのはあまりに失礼な、父親像ではないでしょうか。

昭和 20 年代には、歌壇にも名だたる男性歌人の実生活に即した子育ての歌が少なくありません。高度成長期に入ると、その数はめっきり減り、団塊の世代の歌人は子育てをあまり詠んでいません。再び増えてくるのは、平成に入ってからで、男性が子育てを詠むことについての抵抗感もなくなり、「父親の子育てと社会的背景」が見え隠れしています。

◎ バブル期に 働き過ぎた父親を みていた子供は イクメンとなる

NHK投稿歌

詠者は懸命に働き、高度成長期を支えてきた一人でしょう。家計も豊かにしてきたのでしょう。それを見て育った若い父親たちは、仕事もほどほどにして、家庭では、子育ても楽しんでいきます。詠者からみると、少し羨ましくもあり、歯痒さもあるのでしょう。

一方、若いお父さんから、「イクメンという言葉にはイケメンをもじった語感が軽く、揶揄的で好きになれない。父親が子育てにかかわることにわざとらしい呼び名をつけることはないと思う」と言います。なるほど、父親の子育てが定着していけば、いずれ消えていく言葉でしょう。

ここで「父親の心から成る子育て」とでも名付けたい、現代歌人の秀歌を紹介します。

◎ 冬の夜 みどり児の髪洗いつつ さまざまに霊のことおもうかな 伊藤一彦 「瞑鳥記」

生まれて間もない愛児の髪を洗いながら、ふと、家系や亡き人のことに思いを馳せています。

◎ あした子は 高校入学の式むかふ 八十葉の樹となれ 父もならむぞ 伊藤一彦 「森羅の光」

髪を洗ってやっていた嬰兒は、健やかに成長して高校入学を迎えました。入学式の前夜に父親は、感慨深く「八十葉の樹となれ」と願い、呼びかけています。「八十葉」は「やそば」と読む古語で、豊かな葉が生き生きと繁る様子を表しています。これにあやかって、「豊かに広々と青葉の繁る、大樹となれ」と詠い、そのうえで「父もならむぞ」と結んでいます。この結句こそ作者の伝えたいところでしょう。「お父さんも、小さく収まらずに共々成長していきたい」と決意を示しています。わが子の新しい門出に贈る父の言葉としての気迫すら込められています。

新しい命の誕生に当たっては、家系や亡き人のことに思いを馳せ、高校入学の門出に当たっては、自分も共々に成長するよ、と力強く詠い上げています。まさに範に垂れる姿ではないでしょうか。

父親の会では、少子化時代の父親のあり方についての意見を求められましたが、私は教育者でも評論家でもありません。今さら抽象論を焼き直し尤もらしく述べたてるのは愚かしいと思いました。そこで、唐突ですが日本古来から伝わる、短歌に詠まれている父親像、子育てを探ってみました。韻文である短歌は、誰もが見聞していることを別の視点から見直すことにも意義があります。探り出した歌は100余首に及びましたが、その中から、父親像を求めてやまない私の心を打った、伊藤一彦の秀歌、二首を紹介しました。それは連作ではなく、嬰兒の頃、15年を経た時点で、父親としての深い思いを詠んでいます。歌が収められている自選歌集も違います。そこには父親として、一途に変わらない深い思いが秘められています。ある意味では、人生観と言ってよい思いが伝わってきます。それは、そのまま「父親のあり方」の指標ではないでしょうか。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈若い世代への思いやり〉★毎月10件ペースで相談が続きますが、その7割は子育てと学校の問題です。校内暴力、いじめ、不登校、引きこもり、自殺企図、学力と進路、少年犯罪、セックス、ドラッグ等々多様ですが、いずれも大都市の郊外や新興住宅地の学校を舞台に多発する傾向が強いられます。★我孫子市立E小学校の父親の会では、子ども問題を活発に討論するそうです。父親中心に家族が団結し、校長中心に学校も支援する。どんな危機も一歩手前で解決できるはずです。★少ない子どもなるがゆえに、子どもたちには、生き生きと学校生活を楽しみ、健やかに成長してほしい。家庭や学校や地域で様々なことを学習し経験を積み、個性を磨き人格を育んでほしい、と願います。社会の健全な生命力を涸らすことなく、若い世代に繋いでいくためにも(h)。